

【論文】

新しいアイデアの社会学の生成 ——可能性の空間におけるアノミーとしての創造性 The Formation of a New Sociology of Ideas: Creativity as Anomie in the Space of Possibilities

氏川 雅典[†]

「斬新さということは、理論家の有する積極的で肯定的な側面から生まれるものについてだけ言われるのではない。……思想の変革は、彼らが新たに、独自に打ち出したものとまったく同じくらいの重要性をもって、彼らが、その理論を統一する根本的前提のレベルで、何をしりぞけ、何をことわりなしに省いたかにもよる」(Wolin [1960]2004=2007: 28)。

1 問いの所在——対抗としての時代区分設定

本稿の目的は、学問分野におけるイノベーション、すなわち、アイデアの生成と普及を分析するための方法的課題の一端を整理することにある。具体的には、アメリカにおける2000年以降の知識社会学の展開、特に「新しい」アイデアの社会学(Camic and Gross 2001)の生成プロセスに焦点を当てることにより、この課題に答える。

知識社会学とは、再帰的な特性を持っている。なぜなら、それは社会学の方法を、知識を集散的に生産する学術分野(社会学を含む)に適用するからである。ここで知識とは、当該分野における批判と検証という試練を経て、さしあたり疑いを免れた言明と定義しておこう。換言すれば知識とは、論争において争点としてではなく、主張を支持する証拠として機能するものといえる¹⁾。

その成立以来、知識社会学は短くない時間を有している。この過程で知識社会学は、対象と方法に応じ、幾つかのバリエーションを宿すこととなった。例えば、知識人の社会学、アイデアの社会学、科学社会学、知的生活の社会学(Heubner 2014: 6)などである。アプローチの複数性は闘争性として読み替えることができる。すなわち、単に対象ごとに併存しているのではなく、それぞれのアプローチが対抗的關係にあるのである(Bourdieu 1992=1995,1996; Collins 1998)。

とすれば、新しい時代区分の提起は、単なる事実の記述ではなく、既存のアプローチに対する異議申し立てであり、これにより自身の位置を確保しようとする極めて戦略的な行為である。その一例が、冒頭で述べた、C. キャミックと N. グロスらによる、新しいアイデアの社会学である。彼らは 1970 年代を分水嶺として知識社会学の流れを整理するプロットを提起することにより、それ以前の諸アプローチとの種差化を図ろうとする²⁾。

[†]立教大学社会学部教育研究コーディネーター

この時代区分をふまえ、その後に幾つかの経験的研究が続くと同時に(Gross 2008; Heubner 2014; Camic 2020)、新たな方法論議が展開してゆくこととなる(Frickel and Gross 2005; Gross 2009; Gross 2018)。

そのすべてを網羅することは本稿の目的を大きく超える。そこで本稿では、起点となったC. キヤミックらの新しいアイデアの社会学の成立背景を押さえることで、その「新しさ」がいかなる可能性の空間を開拓したのかを明らかにする。その際、次の点に注意しなければならない。すなわち、単に内容紹介のみに留まるなら、他者たちとの関係からなる位置に応じて、彼らが戦略的に設定した可能性の空間を所与とし、その限界を無自覚に受け入れることになる。

そこで本稿は、新しいアイデアの社会学の知見をそれ自体に再帰的に適用し、新しいアイデアの社会学の生成過程の一端を解明する。一步引いてみるならば、知識の集成的生産プロセスの経験的研究としての新しいアイデアの社会学それ自体も、探究の共同体としての学問分野に提起された新しいアイデアである。それは既存のパターンからの逸脱であり、アノミーの一種である(Bourdieu 1992=1996: 39)。創造性としてのアノミーが可能となり、「創造的なもの」として受容されるには、一体いかなる試練を経なければならなかったのか。このように問うことで、暗黙の諸前提は公的討論の場へと差し戻され、批判、修正、共有のサイクルへと接続されることになるだろう。

以上のような過去の探究の目的は、「かつて何が起こったのか」にあるのではなく、起こりえたが起らなかったこと、つまり、潜在化した可能性を回復し、現在を複数ありえたバリエーションの一つとして相対化することにある(Camic 1997: 6; Watts 2011=[2012]2014: 198)。具体的構成は以下の通り。続く第2節においては本稿の方法——経路創造の過程追跡——について解説する。第3節においてはC. キヤミックとN. グロス(2001)の「新しいアイデアの社会学」を概観する。第4節は、「新しいアイデアの社会学」の形成の契機となった、C. キヤミック(1992)の「評判と祖先選択」論文と、それに続くJ. アレグザンダーら(1996)との論争を取り上げる。第5節では、その論争をふまえ、潜在化した論点を反実仮想により再構成し、新しいアイデアの社会学における「新しさ」の意義を明らかにする。第6節において、以上の議論を整理し、今後の課題を述べ結論とする。

議論を先取りすれば、新しいアイデアの社会学とは、知識社会学におけるプラグマティズム的転回と言ってよい³⁾。すなわち、知識を個人の内面から外部へと引きずり出し、「探究の共同体」における現在進行形の社会的活動のなかに位置づけ、その生成プロセスを追うというものである(Heubner 2014: 6)。知識は探究の共同体における問題解決を巡る討論という試練——批判と修正——を経て生み出される。既存の要素の新しい組み合わせ(Abbott 2004: 111)としての創造性は他者との協働の中で発露し、常に生成途上のもの(Bernstein 2010=2017: 13)として捉えられる。

2 経路創造の過程追跡——境界の生成を追う

2.1 集成的構築物としての事例

上述の問いを明らかにするため、本稿は事例分析の方法を採用する。ここで事例分析とは、特定の時間と

場所において生じた出来事を、『可能な事例のなかの特殊事例』として関係論的に考える」(Bourdieu and Wacquant 1992=2007: 288)ことを意味する。

そのためには複数の可能性を視野に収めつつ、それらを集約することが必要となる。本稿では経路依存および過程追跡の議論を援用しこの課題に答える。以下、敷衍していこう。

事例とは、「緩やかな因果的順序に整序するプロット」(Abbott 1992: 64)を用いて描かれた出来事を意味する。事例分析とは、「ある原因が特定の結果をもたらすときのコンテキストを理解しようとする」(Ragin 1987=1993: 2)ことであり、文脈(コンテキスト)とは、「関心のある事柄を取り囲み、それによって関心のある事柄を定義するもの」(Abbott 1999=2011: 267)である。

それゆえ、事例とは、研究者が各自の関心に基づいて制作した構築物である。それは「社会科学共同体の集会的産物であり、社会科学の実践を形作り、制約する」(Ragin 1992a: 11)。なぜなら、「経験的世界は、その細部、複雑さ、具体性、特異さにおいて際限がない。……私たちは、概念で制限をかけることにより、その無限を理解」(Ragin 1992b: 217)しなければならないからである。それゆえ、C. レイガンは、以上の点を「事例化 casing」(Ragin 1992b: 218)として強調している⁴⁾。

よって事例分析の成否は、「同じ結果に至る異なる因果経路や、異なる結果に至る同じ因果要因」(George and Bennett 2005=2013: 247)などの、諸事象同士の非線形的相互作用が生み出す無数の可能性の中から、次の2点を決定することにある。すなわち、①どこから始まり、終わるか、②諸要素をどのように結びつけるか、に関するプロット——複雑な空間的相互作用を時間的に構造化する方法(Abbott 1999=2011: 291)——を有しているかどうかである。そのプロットとして本稿が採用するのが経路依存と過程追跡である。

2.2 経路依存論と過程追跡

誤解を恐れずに言えば、経路依存論とは、自己強化プロセスに着目し、現実世界に境界を設定しようとする試みである。P. ピアソンによれば経路依存とは、「初期段階での比較的小きな摂動の影響を受けてその後に複数から帰結が生じる可能性があるが、ひとたび特定の経路が定まれば、自己強化過程から方向転換することは非常にむずかしくなる」(Pierson 2004=2010: 13)ことをいう。なぜなら、「それまでは選択可能であった別の選択肢に切り替えるコストが増加していく」(Pierson 2004=2010: 26)からである。

これにより、後戻りが困難になる時点——「ロック・イン」(Pierson 2004=2010: 22)——の前後、および初期事象が、時の流れに区切りを設ける転換点となる。言い換えれば、転換点とは、その帰結に大きな影響をもたらす「別々の因果的配列が特定の時点で連結」(Pierson 2004=2010: 15)することに他ならない。誤解を恐れずに言えば、時間とは関係性の結合と分離の総称なのである。

因果系列が共鳴する転換点においては、アクターが取りうる選択肢のレパートリーの増減をもたらす。すなわち、「可能な選択肢全体から一部のものが取り除かれる」(Pierson 2004=2010: 16)のである。それゆえ、「いつ生じたのか」という時間的順序が重要となる。なぜなら、「一定の選択肢の排除が歴史的配列のその後の選択点において異なる帰結を生じさせるからである」(Pierson 2004=2010: 67)。

以上の経路依存をふまえた現象へのアプローチが経路依存論である。極めて大雑把にまとめるならば、経

路依存論とは、**可能性の空間における事象の潜在／具現のダイナミズム**を解明しようとする試みである。つまり、失われた選択肢を回復し、時間的順序を意識した上で、特定の経路が自己強化するプロセスを追うのである⁵⁾。

一言補足するなら、経路依存論は「**発見法** heuristics」であるということだ。それは現実世界を時間的推移によって理解するためのモデルであり、その狙いは対象を強引にモデルへと還元することにあるのではなく、**逸脱事例**をそれとして発見するためにある。すなわち、「特定の事例である定着パターンが生じそこなった」(Pierson 2004=2010: 91)のはなぜかを問うことが可能になる。このような既存パターンからの逸脱を本稿では「**経路創造** path creation」(Garud and Karnøe 2001: 2)と呼ぶ⁶⁾。この逸脱のプロセスの解明も重要な課題となる⁷⁾。

経路依存論が時間的推移のモデルであるとするならば、過程追跡は可能性の空間における失われた選択肢を回復するための方法である。転換点において失われた選択肢は、気づかれにくい。それゆえ、プロセスを追う際にセレンディピティ——意図しなかった重要なデータをそれとして把握するセンス——が必要となる。

過程追跡(process-tracing)は、「完全かつ途切れることのない証拠の連鎖」(George and Bennett 2005=2013: 30)を構築しようとする。それゆえ、分析の成否は、いかに当該事例に関する説明の証拠を増やせるかどうかにある。この課題に対処するため導入されるのが**反実仮想**である。すなわち、「～であるならば、…のはずである」と問いかけることにより、「原因と結果の連結が明らかにされ、より小さなステップに分けられる。つぎに、研究者はそれぞれのステップにおいて観察可能な証拠を探す」(van Evera 1997=2009: 66)のである。

要するに、見落としていた徴候をそれとして読み取るための工夫に他ならない⁸⁾。このような過程追跡の方法は、探偵や刑事の犯罪捜査における推論と同様のものである(George and Bennett 2005=2013: 242)。つまり事例を増やすのではなく、新たな視点のもとで見直すことにより、何を証拠と見なすかについての定義を更新するのである⁹⁾。それは同時に、どこで、何を探せばよいのかについての指針ともなる。

以上の議論をまとめるなら、事例分析とは、「因果関係の複雑さが最大限ありうることを前提にすることから始まり、その複雑さをより単純なものに切り崩していこうとする」(Ragin1987=1993: 6 強調は引用者)ことに他ならない。**複数あるが無限ではない**。事例分析は、可能性の空間における具現化／潜在化する経路を描き出そうとする試みであり、「**可能性の科学**」(Berger and Berger [1972]1975=1979; Becker [1982]2008=2016)としての社会学を実践する一つの方法と言えよう。

2.3 レシピとスパイス——時の試練、レトリック、境界の生成

本稿における事例化の簡単なレシピを定式化しておこう。第 1 に、出発点としては、異なる因果系列が合流する転換点に着目する。第 2 に、そのような合流を可能にした条件について、ありえたにもかかわらず排除された選択肢に配慮しつつ明らかにする。第 3 に、その知見に基づき当初の転換点に立ち返り、存在していたが気づかれなかった可能性を指摘する。

このレシピにおけるスパイスを予め明かしておこう。それは**レトリック**である。本稿の試みは強いて言うなら、経路創造の過程追跡であり、既存パターンからの逸脱が生じるプロセスに焦点を当てている。逸脱は創造性

でもある。いかなる創造的アイデアも、それに続く批判や無視(Garud and Karnøe 2001: 14)などを克服する「時の試練」を経る必要がある。なぜなら、どんなアイデアもそれ自体では持続しえず、それを使用し、生計を立てる人々を動員しなければならないからである(Becker [1982]2008=2016: 328; Latour 1987=1999: 238; Csikszentmihalyi 1996=2016: 31, 305)。その動員のプロセスにおいて創造的逸脱者は、自身のアイデアを他者に説得しなければならない。とするならば、レトリックとは、知的資源を駆使し、相手の選択肢を制限しようとする試みに投入される技法や知識の総称と言える。

要するに、転換点において生じた創造的逸脱が、続く時の試練において、いかなるレトリックを通じて、可能性の空間が構造化されるのか、換言すれば、境界が生成する(Desmond 2014)のか、を追うのである。理解のため議論を先取りしておこう。創造的逸脱は一瞬で完成しない(Csikszentmihalyi 1996=2016: 8, 214)。それらは時の試練において、複数のフィードバックを受けながら修正されつつ、受容される。それゆえ、創造的逸脱とは、批判者をも含めた集合的活動なのである(Becker [1982]2008=2016: 216; Latour 1987=1999: 48; Bourdieu 1992=1995: 117)。

3 「新しい」アイデアの社会学

3.1 反還元主義と「フィールド」

「新しい」という形容詞は闘争の手段であり、その機能は境界を生み出すことにある。なぜなら、形容詞とは、潜在的な比較を伴う言葉であり(鈴木 1973: 62)、既存の枠組みを超え出るものを「新しい」とすることにより、既存の枠組みそれ自体を「旧」として背景に追いやる効果をもつためである。しかし、新/旧のカテゴリーが効果を発揮するには、それに対する批判と正当化という論争の試練を経た後である。論争とは、複数のアクターが交わる境界の指標であり、それゆえ事例研究の起点となりうる(Latour 1987=1999: 13)。

C. キャミックと N. グロス(2001)の目的は、1970年代を一つの分水嶺とする「新しい」アイデアの社会学により、今後の研究の礎を提供することにある。以下の表 1 は新/旧アイデアの社会学を対照表の形であらわしたものである。

古いアイデアの社会学の問題とは、内/外の二分法に基づいた還元主義であるといつてよい。すなわち、「内なる」思想内容と「外部」の社会的文脈とを分け、主に後者に考察の焦点を当て、「知識人たちの概念や信条、議論を説明するために、あらゆるマクロレベルの要因を引用」(Camic and Gross 2001: 241)しようとする態度である。このような還元主義は、思想と文脈を直結させることで、当時の知識人たちの関係性からなる界、および、その中における各自の位置を無視する。それゆえ、単にテキストを読むだけで正しい解釈を得られると早合点してしまう——「平明な transparent」テキストという想定(Camic and Gross 2001: 240-1)¹⁰⁾。

これに対し、新しいアイデアの社会学は、アイデアが生まれ、発展し、変化する社会的プロセス(Camic and Gross 2001: 236)を追跡する試みである。それは還元主義を切断し、いわば「内側から」アイデアの生成プロセスを捉えようとする。その際の中心的概念が、諸関係のネットワークとしての「フィールド field」である(Camic and Gross 2001: 248)。その思想的源泉として、C. キャミックと N. グロスは、科学的知識の社会学と思想史における言語論的転回を挙げる。

表1 新／旧アイデアの社会学対照表

	古いアイデアの社会学	新しいアイデアの社会学
時期	1940年～1970年	1970年～2000年
主体	K. マンハイム、R. K. マートン、L. コーザー、 A. グールドナー	①科学的知識の社会学(D. ブルア他)、②イデオロギー論(T. イーグルトン他)、③組織の文化社会学、④思想史、⑤P. ブルデューや R. コリンズの知的領域に焦点をあてた社会学理論
1	手段としてのアイデアの社会学	目的としてのアイデアの社会学
2	内部／外部の区分	内部／外部区分の拒絶
3	平明なアイデア	コンテキスト主義
4	マクロ社会要因に焦点	ローカル主義
5	客観的な社会的カテゴリーとしての知識人	知的な位置をめぐる闘争と諸フィールドの重要性

C. キヤミックと N. グロス(2001)を元に作成。

3.2 科学的知識の社会学と思想史

3.2.1 D. ブルアのストロング・プログラム——対称性

第一は、イギリスの科学社会学者 D. ブルアの「ストロング・プログラム」である。それまでの R. K. マートンに代表される科学社会学は、内部／外部の区分に基づき、主に後者に焦点を当てた科学者「集団」の社会学であり、また「真／偽」の区別により、誤った知識にのみ社会的影響を認めてきた。それに対し、「ストロング・プログラム」においては、内／外、真／偽の分け隔てなく「対称的 symmetrical」に、正しいとされる科学的知識をも社会学的考察の範囲に含めるべきと主張した。これによりブラックボックスが開かれ、科学的知識の生産プロセスにおいて、科学者たちが行っていること——同僚を説得するためのレトリックの使用など——を説明する各種研究が生み出されることとなった(Camic and Gross 2001: 244)。

3.2.2 思想史における言語論的転回

第二は、Q. スキナーや J. G. A. ポーコックらによる、思想史における言語論的転回である。例えば、Q. スキナーは、思想史の資料としてのテキストは、それ自体で自律した意味を持つという、それまでの思想史において主流であった考えを批判し、テキストをある意図を持った著者の手による歴史的産物として捉えねばならないと主張した。そして、思想家の同時代人たちの著作群からなる社会-言語的文脈を慎重に再構成し、その文脈のなかに当該思想家のテキストを位置づけ、発話によって何を「行って」いるかを明らかにしなければならない。なぜなら、このような議論における遂行的側面こそ、著者の意図の現れに他ならないからである(Camic and Gross 2001: 246)。

誤解を恐れずに言えば、ストロング・プログラムと、思想史における言語論的転回は、学問共同体における同僚達とのコミュニケーションのなかで、アイデアの生成と受容を問う道を切り開いたといつてよい。そして、思想家個人でもなく、社会的文脈でもなく、研究者や思想家達の織り成す関係性を捉えるために導入されたのが、「フィールド」である。

3.3 闘争のフィールド——正統性を巡る攻防

3.3.1 正統と異端の闘争

関係性をどのように概念化するのか。この問いに答えるために導入されたのが、P. ブルデューの「界」概念 (Bourdieu 1992=1995,1996)である。もちろん、P. ブルデューの「界」概念が、そのまま直輸入されたわけではない。受容の窓口となったのがF. リンガーである。

F. リンガーは、既存の思想史というジャンルに一般的な方法論的個人主義および還元主義、すなわち著名であるという理由だけであるテキストを取り上げ、その命題を論理的に分析し、その生成や変容を適宜社会的文脈に直接還元することで説明しようとする立場(Ringer 1992=1996: 13, 23)を切断するため、P. ブルデューの界の概念を自身の知の歴史社会学に導入する。界とは、諸関係のネットワークであり、参加者たちは、何が正統であるかを定義する権利をめぐり闘争を繰り広げている。参加者のうち、有力な正統派は保守的に、少数の異端派は革新的に振る舞う。とはいえ、両者の関係は相互規定的であり、さらに言えば対立に先立って暗黙の基盤を共有している。界をとりまく大きな社会的文脈に対し、界は相対的自律性を有しており、その影響は界独自の論理を介して伝達されることになる(Ringer 1992=1996: 6-11)。正統と異端の闘争からなる界概念は、「異端的逆倒」(Ringer 1992=1996: 321)や「偶然性が支配する領域」(Ringer 1992=1996: 21)などを照射する。

3.3.2 新参者のジレンマ

このような「界」の視点をふまえ、「新しいアイデアの社会学者は、アイデアを生み出す人々を、お互いに多様な聴衆と共に、ある種の知識人(科学者、人文学者等々)として正統性と体面を打ち立てようと、特定の闘争——アイデアの生産と結末に重要な影響を及ぼしうる——に歴史的に参与している者として見なす」(Camic and Gross 2001: 248)。

フィールドの支配者と新参者の正統性をめぐる攻防において、特にアイデアの生成にとって重要な局面が「新参者のジレンマ」、すなわち「すでに普及している科学の概念に従って正統性を打ち立てねばならないと同時に、既に確立した諸科学から自身を差異化するという問題」(Camic and Gross 2001: 247)である。新しいアイデアには、既存のパターンからの逸脱が必要であるが、同時にその「新しさ」を既存のパターンを受け入れている聴衆に説得しなければ継続できない。ここにおいて、「いかにして知識人たちは自分のアイデアを持つに至ったのか?」(Camic and Gross 2001: 243)というプロセスへの問いが成立する。

C. キャミックとN. グロス、闘争のフィールドとしての学問分野という視点から、アイデアの生成と普及を扱った具体例としてM. ラモント(1987)およびR. コリンズ(1998)を挙げている(Camic and Gross 2001: 248)。

3.4 遂行的矛盾

以上が新しいアイデアの社会学の概要である。足早に次の展開に移ることも可能であるが、ここではC. キャミックらの議論における遂行的矛盾について取り上げたい。新しいアイデアの社会学は、それまでの内/外の二分法に基づく還元主義を批判し、アイデアの生成を徹底的にローカルな文脈でとらえることを主張する。しかし、その時、排除されているのは新しいアイデアの社会学が生成した文脈である。新しい科学的知識の社会学

と思想史の改良の延長にそれは生まれたものではない。

一体なぜ C. キャミックらはそのようにせざるをえなかったのか。一つの仮説として、彼らもまた新参者のジレンマに直面しており、新しいアイデアの社会学とは、聴衆に向けられた正当化戦略の一環であることが考えられる。とするならば、その正当化は、他のどのような可能性が有りうるなかなされたのか。冒頭のエピグラフに掲げた政治思想史家 S. ウォリンの言うように、何を排除するかも「新しさ」である。つまり、新しいアイデアの社会学が、なにを排除することで成立しているかが問われなければ、その意義は半分しか明らかではない。

よって、C. キャミックらがその一部を構成する他のアクターたちとの関係性のフィールドを再構成した上で、再び新しいアイデアの社会学をその中に位置づけ直すことが必要となる。この視点に立てば、新しいアイデアの社会学に先行する 1992 年の C. キャミックの論文を巡る、J. アレグザンダーらとの論争が重要な契機として浮上する。この論争については田邊(2008)による詳細な紹介がある。よって、以下では本稿の目的に沿った形で論争の概略を示す。

4 「祖先」を巡る論争

4.1 「評判と祖先選択」論文

C. キャミック(1992)の目的は、そのローカルな文脈に位置づけた上で、理論の生成「プロセスを追う」(Camic and Gross 2001: 247)ことにある。具体的には、T. パーソンズが『社会的行為の構造』(1937年)において、マーシャル、パレート、デュルケム、ヴェーバーを、なぜ取り上げたのかの解明である。

学問は集合的活動でありながら、すべての研究が等しく注目されるわけではない。ある研究は引き継がれ、別のものは無視される。この知的祖先選択を通じ分野の古典が形成されることとなる(Camic 1992: 421-2)。

祖先選択プロセスを説明する一般的プロットに「内容適合モデル」がある。このモデルは、現在の基準に照らして内容が関連しているから、複数の先行研究の中からある研究が知的祖先として選択されたとする。例えば、R. コリンズ([1985]1994=1997)。しかし、このモデルは、関連性を論証する際、①それ自体構築物である研究対象者(理論家)の証言を絶対視しており、②選ばれる可能性があつたにもかかわらず実際には選択されなかった諸研究を体系的に無視するという問題を抱えている。よって、内容適合モデルを補う経験的アプローチが求められる(Camic 1992: 423-4)。それが「評判モデル」である。

C. キャミックは未刊行の草稿や書簡に依拠しつつ、T. パーソンズの『社会的行為の構造』に含まれる可能性があつたにもかかわらず、実際は排除されたものとは、当時の制度派経済学——T. ヴェブレンに代表される、功利主義的個人を批判し、価値、道徳、制度などを重視する立場——であると指摘する(Camic 1992: 428-32)。

T. パーソンズの祖先選択を説明するには、当時の文脈における制度派経済学に対する評判を考慮しなければならない。なぜなら、先行研究との出会いは、真空ではなく、同時代人たちとの討論のなかで生じるからである。そして1920年代後半にパーソンズが属した、ハーバード大学の同僚達からなるサークルにおいては、制度派経済学に対する評判は否定的なものが大半であり、知的討論においてその大勢はほぼ定まりつつあつた。

ここで重要なのは、その時点で彼の思想は生成途上にあつたという点である。その時、こちらの方向はうまくいきそう、あちらの方向は難しいという指針を、評判を通じて提供したのがハーバード大学における知的サークルなのである。そこにおいて、マーシャル、パレート、デュルケム、ヴェーバーが話題になればなるほど理論形成の資源として用いられ、逆に、制度派経済学が否定的に言及されればされるほど、ますます知的資源としての価値は低下する。このような自己強化プロセスにより、T. パーソンズは、聴衆にとって確かな議論とするため、制度派経済学を祖先から外したのである(Camic 1992: 433-7)。

もちろん、このような評判モデルは普遍的なものではなく、分野の状態に依存している。知識生産の方法が定型化している(がゆえに)相互依存度が高い分野では、祖先選択は内容適合モデルに従う傾向がある。これに対し、定型化された方法が確立していないため、メンバーが、それぞれ異なる研究者を参照する相互依存度が低い分野では、評判モデルが適合しやすい。ここでの祖先選択は個人的交流を介するがゆえに、偶有性の余地が多分に存在する。T. パーソンズの祖先選択は、その一例なのである(Camic 1992: 439-40)。

4.2 評判モデルを巡る論争

4.2.1 人格攻撃のレトリック

既存パターンからの逸脱は攻撃でもある。それゆえ、時として激しい憎悪によって迎えられる(Becker [1982]2008=2016: 332)。C. キャミックによって、内容適合モデルの一例とされた J. アレグザンダーは、G. シオルティノーと共に、評判モデルに異議を唱えた。

極めて大雑把にまとめれば、J. アレグザンダーらの批判は、**人格攻撃のレトリック**である。人格攻撃(ad hominem argument)とは、話者の認知的能力などを問題とすることにより信頼性を失わせ、そのことにより主張の信憑性を削減する技法を意味する(Walton 1998: 112, 191)。すなわち、発言と行動の不一致(**語用論的矛盾** pragmatic inconsistency)を指摘し相手にさらなる挙証責任を負わせ、上手く回答できなければ聴衆の信頼を失う(Walton 1998: 135-6)よう仕向ける手である。「相手の話を聞くことは無意味だと聴衆に思わせることによって、事実上、相手が言論に参加する権利を否定すること」(Eemeren and Henkemans 2017=2018: 141)が人格攻撃の機能である。

具体的には、C. キャミックにおける議論の曖昧さを繰り返し指摘(Alexander and Sciortino 1996: 156-7, 60)。「大工仕事に鍛冶屋の道具を用いている」(Alexander and Sciortino 1996: 162)と揶揄して彼の能力への疑問を喚起。さらには C. キャミックの主張を既存研究に含めつつ、「大した独創性」(Alexander and Sciortino 1996: 169)とアイロニー的表現を用いるなどの人格攻撃が挙げられるが、中でも「還元主義」とのラベリングをし、彼を批判することが J. アレグザンダーらの中心的な作業である。

まず、J. アレグザンダーらは、初期パーソンズの未刊行草稿集の編纂という C. キャミックの仕事の評価し、祖先選択という問いの重要性も認める(Alexander and Sciortino 1996: 155-7)。なぜなら、「影響力のある知的研究の受容は、同時代や後続する研究仲間に利用可能な新たな代替案を生み出すことにより、既存の伝統によって作られる知的空間を根本的に変えうる」(Alexander and Sciortino 1996: 157)極めて創造的プロセスだからである。C. キャミック(1992)の試みは、このプロセスの経験的事例研究であり、新しい知識社会学の提唱である(Alexander and Sciortino 1996: 158, 162)と彼らは評する。

しかし、J. アレグザンダーらにとって、C. キャミックの言う「評判モデル」が祖先選択を扱う「唯一の道」という主張は到底承服しうるものではない。なぜなら、それはテキストと文脈という、いわば内／外の二項対立を前提に、祖先選択の基準を後者に還元してしまう。しかし、祖先選択は、雇用、名声、権力などによってのみなされるのではなく、T. パーソنزの理論的「意図」に基づき思想内容の相違を判定することによって可能になる。とするならば、制度派経済学は、選択される可能性があったにも排除されたものというよりは、そもそも T. パーソنزの狙いから外れていたがゆえに除外されたのである。C. キャミックは両者の類似性を強調するあまり、その内容的差異を過小評価している。要するに、C. キャミックの「評判モデル」という還元主義は、研究者間の評判情報の交換を分析する 1960 年代の初期科学社会学(例えば W. ハグストローム)の焼き直しであり、それを C. キャミックが理解していないことは恥ずべき事である(Alexander and Sciortino 1996: 156, 59-69)。

4.2.2 アイデアの社会学

以上の J. アレグザンダーらの批判に対し、C. キャミックは同様に人格攻撃で応酬する。すなわち、彼らの社会学はその振る舞いにおいて極めて反社会的であることを示すのである(Camic 1996)。彼らの批判は政治キャンペーンにおけるレトリックのごとく、誤読と誤った引用に基づき、C. キャミックが言っていないことを当人の発言とする藁人形論法(straw man)を使って批判しているに過ぎない(Camic 1996: 172)。

なぜ T. パーソنزがアメリカの社会科学を脱し、ヨーロッパに目を向けたのか。この祖先選択の問いに対し、J. アレグザンダーを含む既存研究は、当時のアメリカは価値や規範的秩序に関する理論の不毛の地であったため、T. パーソنزが E. デュルケムや M. ヴェーバーの意義を「発見した」と、T. パーソنز個人(の能力)に焦点を当て説明する(Camic 1996: 173,6)。

「評判モデル」の狙いは、このような個人主義的な祖先選択を批判することである。そのため周囲の人々との議論を通じた自己強化的な基準の形成を示したのである(Camic 1996: 174)。その際、知的資源として利用したのが、B. ラトゥール(1987=1999)に代表される近年(1996 年時点)の科学社会学における展開である。すなわち、①結果としての生産物ではなく、科学的知識が生産されているプロセスを注意深く分析する。②その生産プロセスは社会的なもの、という主張である。研究者が行う、概念、方法、古典に含むべき先駆者の選定などの広範な知的生産に焦点を当てるアプローチを、C. キャミックは「アイデアの社会学 sociology of ideas」と定義する。1992 年論文はアイデアの社会学を T. パーソنزに適用したものに他ならない(Camic 1996: 174-5)。

J. アレグザンダーらの批判は、完全にこの点を捉え損ねている。その原因は彼らの理解が科学社会学の動向に追い付いていない点にある(Camic 1996: 176)。それゆえ、B. ラトゥールらによって批判された「内／外」という区分を持ち出し、前者に内容適合モデルを、後者に評判モデルを重ね合わせた上で、祖先選択から後者を排除しようとする。しかし、このような社会文化的要因を排除し、T. パーソنزの個人的才能によって祖先選択を説明しようとする J. アレグザンダーの方こそ本質的還元主義である。それゆえ、彼らの社会学とは極めて反社会的なものなのである(Camic 1996: 175-80)。

4.3 ドメイン変更としての祖先選択／指定

4.3.1 可能性の空間としてのドメイン

誤解を恐れずに言えば、C. キャミック(1992)の「評判モデル」は、潜在的読者を発掘するためのキャンペーンに他ならない(Becker [1984]2008=2016: 157)。そこにおいて彼が直面したのは、新参者のジレンマであるといつてよい。創造を行うものは既存のパターンから逸脱を必要とするが、自身の試みを創造的なものとするには、未だ既存パターンを受け入れている聴衆からの批判に答えねばならない。この時の試練を乗り越えねばアイデアを利用する新規顧客獲得は見込めないのである。

幾つかの補助線を導入し、以上の論争の意義を明確にしておこう。論争において両者が用いたレトリックは、相手の自己矛盾を示すことで聴衆の信頼を失わせようとする人格攻撃であるが、それを効果的なものとするために、互いに相手を「古いもの」と結びつけようとする、いわば他者からの**祖先指定**の動きがみられる。例えば、J. アレグザンダーらは、B. ラトゥールではなく W. ハグストロームと C. キャミックを結びつけ(Alexander and Sciortino 1996: 169)、C. キャミックは J. アレグザンダーらを T. クーンや D. ブルアと関連付ける(Camic 1996: 176)。

この祖先指定の動きは「ドメイン domain」という視点からよりよく理解できる。ドメインとは、各専門分野において蓄積された「記号体系の諸規則や手続きのまとまり」(Csikszentmihalyi 1996=2016: 31)のことを指す。分野内のメンバーたちは、このドメインを利用して日々の仕事を行う。その際、ドメインは、制作を可能にするものであると同時に制約するものでもある(Becker [1982]2008=2016: 9; Bourdieu 1992=1996: 95)。つまり、「何が議論されるべきか、何が本当に関心を抱くべき事柄なのか……、何が論争できるものと認められているのか」(Latour 1987=1999: 93)を判定する指針をドメインは提供する。よって、その変更は「新しい可能性を提供」(Arthur 2009=2011: 94)することを意味する。

とするならば、相手の知的祖先を指定する動きは、ドメインの制限であり、その主張によって可能になることを制限することに他ならない。なぜ、このような手が取られるのか。当該アイデアを利用する聴衆に影響を与えるためである。「ひとが実際にそのイノベーションで何をするかは、それで何ができるか、彼らが同時代の伝統と関心のどんなバージョンを持つか、そして彼らがどんな人々と資源をあつめられるかに依存して決まる」(Becker [1982]2008=2016: 341)。祖先指定は、聴衆のアイデア利用を制限することにより、当該アイデアが普及することを妨げる。そして、聴衆を動員することに失敗したアイデアは次第に衰退し、やがては消滅するか、来る日の再発見を待つことになる(Becker [1982]2008=2016: 337)¹¹⁾。

4.3.2 現場に宿る知——ディープ・クラフト

とするなら、C. キャミック(1992)の「評判モデル」とは、T. パーソンのドメイン変更が、どのようになされたのかについての経験的事例研究として見ることができよう。

既存のドメインから逸脱し創造を行う者は、自身の作品の良し悪しを判定する基準の喪失に直面する(Becker [1984]2008=2016: 227-8)。「誰を信じるべきなのだろうか?」(Latour 1987=1999: 15)。いわば、何を拒絶するかははっきりと分かるが、何がよいのかが曖昧という状態である(Farrell 2001: 21)。この時、作品に対するフィードバックを与え、イノベーターが新たな可能性の空間における方向感覚を形成するのに寄与するのが、彼／彼女が属する知的ネットワークなのである。T. パーソンの場合、それがハー

バード・サークルであった(Camic 1992: 435)。

このようなサークルには、ディーブ・クラフトが高度に凝縮されていると B. アーサーは指摘する(Arthur 2009=2011: 204)。ディーブ・クラフトとは以下のような日々の活動を通じ暗黙の裡に身体化された知識である。

作動しそうか作動しないかを知ること。どんな方法を使用し、どんな原理が成功しそうで、どんなパラメーター値を所与のテクノロジーに使用すべきかを知ること。廊下に行って誰と話せば事がうまく運べるか、つまり、どうしたら間違った方向に行かないように固定できるか、何を無視し、どんな理論を見せておくべきかを知ること。(Arthur 2009=2011: 203)

つまり、特定の場所に形成されるサークルに宿るディーブ・クラフトを通じ、自らに適した将来を読み取る術(Bourdieu and Wacquant 1992=2007: 288)が獲得される。T. パーソンの祖先選択を可能にしたものはこれであり、それゆえ、その選択は彼一人にのみ帰せられるのではなく、「適切な時期に適切な場所」(Csikszentmihalyi 1996=2016: 52)にいたからこそ可能となる集合的選択なのである。

4.3.3 もう一つの知的祖先——文化の社会学

アイデアの集合的創造という点に着目するならば、「評判モデル」のもう一つの知的祖先として、文化の社会学を挙げることができよう。例えば、C. キャミック自身も引用している、H. ベッカー([1984]2008=2016)は、作品を生み出す際、無数の可能性の中からの選択には多くの人々が関っており、「アーティストではなく、アート・ワールドがアート作品を作る」(Becker [1984]2008=2016: 216)と述べる。また、M. ラモント(1987)は、「なぜ哲学者 J. デリダは、彼の思想が極めて難解であったにもかかわらず、フランスおよびアメリカで受容されたのか」という問いを、マーケティングの視点から考察している。すなわち、J. デリダ(という商品)は、むしろ難解であったからこそ、当時の分節化された文化市場に受け入れられたのであり、そのことを可能にした複合的な環境的要因について論じている。H. ベッカーと M. ラモントの研究は、アート作品の生産、文化財の受容という対象の違いはあるけれども、その選択の際に他者たちの評判が重要な要素であることを両者ともに強調している。

このような文化の社会学と 1970 年以降の科学社会学という、異なる社会学の下位分野を、祖先選択という問題を解決するために、両者を統合したドメインを生み出した点は C. キャミックの貢献としてよいだろう。

5 「新しいアイデアの社会学」再考

5.1 発見法としての論争——祖先への自覚

以上の論争は、一方はプロセスに、他方は結果に焦点をあてるアプローチ同士の対立(Latour 1987=1999: 6-7)、もしくは異端と正統の争い(Bourdieu 1992=1996: 51)とみることができる。そして論争は、それ自体有益な発見法に他ならない。なぜなら、「自分が行っていることを、別の方法論の立場の人はどうに理解するだろうかと自問する」(Abbott 2004: 77)ことを促すからである。

C. キヤミック(1992)の立場とは、T. パーソンズを生成途上に位置づけ、周囲との相互作用を通じて、可能性の空間における自身の方向性を獲得していったことを史料から明らかにしようとするものである。いわば、対象者が当該分野において一廉の人物となる前の段階の視点に立つよう努め、そのプロセスを追うのである(Bourdieu 1992=1995: 160; Collins 1998: 101)。対するJ. アレグザンダーらの立場は、すでに社会学史上重要人物のパーソンズを所与とし、彼の著作から、選択を可能にしたT. パーソンズの意図をテキスト間の比較考量を通じて明らかにしようとする。著作があるなら、それを生みだした意図、本人の狙いがあるはず、というわけである。

J. アレグザンダーらからすれば、祖先選択の基準が集散的に構築されるとするC. キヤミックの立場は、理論不毛の地アメリカに降り立つヨーロッパ帰りの救世主としてのパーソンズ像を揺るがすものとなる(Camic 1996: 173, 8)。さらに言えば、パーソンズ研究者としてのJ. アレグザンダー自身の立場も危うくなる。それゆえ、C. キヤミックの主張を、古い議論、既存研究と結びつけ、そのラディカルさを馴致化——新しくもないし独創的でもない——しようとしたのである。

これに対しC. キヤミック(1996)は、自身の祖先を明確にし、既存のアプローチとの差異を明確にするため「アイデアの社会学」を打ち出したのである。とするならば、J. アレグザンダーらの批判は、C. キヤミックの議論の曖昧な点を指摘していたのであり、彼が克服しなければならない「強さの試練」(Latour 1987=1999: 90)であるといつてよい。その試練はC. キヤミックに自身の知的祖先の反省を促し、その自覚的選択を促す機能を有していたと言えよう。そしてこの延長線上にC. キヤミックとN. グロスの新しいアイデアの社会学は位置しているのである。

5.2 歴史的偶有性としての新しさ

いかなるアイデアや作品も、それを利用する聴衆の手に委ねられている(Becker [1984]2008=2016: 25; Latour 1987=1999: 45)。よって、説得を試みる者は、聴衆の振舞いを統制し誘導しなければならぬ。それによりアイデアを利用し、維持する人々を動員することができるからである。もし動員に失敗すれば、そのアイデアは使用されず、やがては忘れられることになる(Becker [1984]2008=2016: 337; Latour 1987=1999: 203-38)。

先に3-1で論じたC. キヤミックとN. グロス(2001)における「新しい」という形容詞の戦略的使用および遂行的矛盾の理由もここにある。すなわち、J. アレグザンダーらの強さ試練——C. キヤミック(1992)の主張を、別の方向へと捻じ曲げようとする力——に対応するため、新しい科学知識の社会学(Lynch 1993=2012)や思想史、さらには他の知的祖先(P. ブルデューやR. コリンズ)と新しいアイデアの社会学を内容適合モデルにより結びつけることにより、聴衆の読みを統制しているのである。

ここで重要な点は、他ならぬC. キヤミックら自身の主張も生成途上にあり、その際、偶有性が介在する(Becker [1984]2008=2016: 397; Ringer 1992=1996: 21)ことである。新しいアイデアの社会学は、それまでの分野の動向を概観する『必携 companion』に掲載されている。『必携』の執筆者にC. キヤミックとN. グロスが選ばれたのは、彼らが新しいアイデアの社会学の提唱者であったからではない。そうではなく、彼らは『必携』執筆というチャンスをかかして新しい／古いアイデアの社会学という基準をその時に提示し、

『必携』を利用する幅広い読者層を説得するため、メジャーな知的祖先を新しいアイデアの社会学の祖先として選択したのである。

このような複数の知的祖先を動員する権威に訴えるレトリック(Latour 1987=1999: 52)は、それに対する批判のコストを増大させる。それゆえ、ここにおいて別の選択肢への切り替えコストの増加に伴う自己強化過程(Pierson 2004=2010)、すなわち経路依存の契機を見出すことができよう。その結果、1970年代を分水嶺とする新/旧の区分は、知識社会学の歴史を語る際のプロットとして利用されることになる(Heubner 2014)。

しかし、それは本稿がこれまで論じてきたような、アイデアの社会学が生成するローカルな文脈を排除するという代償を伴っている。C. キャミックがアイデアの社会学を、大勢の読者に向けて語る際、他でもありえたにもかかわらず、「新/旧」のカテゴリー、すなわち、「祖先選択」というプロットを選択したのは、J. アレグザンダーとG. シオルティーノによるフィードバックに応答することで、C. キャミックが獲得した知的フィールドにおける自身の位置と方向感覚——ディープ・クラフト——の結果としてみる事ができよう。それゆえ、J. アレグザンダーとG. シオルティーノも、新しいアイデアの社会学の形成に寄与した陰の立役者たちなのである¹²⁾。しかし、彼らの貢献は、新しいアイデアの社会学が宣言されると同時に消え去り、そのテーマ選択にわずかに痕跡を残すのみとなる(Becker [1984]2008=2016: 393; Latour 1987=1999: 234; Watts 2011=[2012]2014: 155-6)。C. キャミックらの「新しさ」の主張とは、彼ら自身の(敵対的)祖先を忘却することの上に成立しているのである。

ここにおいて C. キャミックにのみ「創始者」のラベルを貼り(Latour 1987=1999: 232-3)、著作群の論理分析を通じて彼の意図の再構成を試みることもできよう。しかし、これまでの本稿の議論に基づけば、新しいアイデアの社会学とは、潜在化していた諸可能性が、『必携』執筆というチャンスにより、他の可能性の排除により特殊化した事例なのである。より一般化して言えば、以上のような「歴史的偶有性 historical contingencies」(Camic 1997: 6)を伴いつつアイデアは生成すると言ってよい。

5.3 反実仮想による可能性の探索

では、C. キャミックと N. グロス(2001)の新しいアイデアの社会学は、一体いかなる可能性を排除することの上に成り立っているのか。「過去に目を向けるとき、われわれは起こったことしか見ない、つまり起こったかもしれないが起らなかったことには目が行き届かない」(Watts 2011=[2012]2014: 198)。しかし、「なにが消えているのかを思い出すことも重要である」(Abbott 1999=2011: 301)。

排除された可能性を探究する方法が**反実仮想**(counterfactuals)である。すなわち、「もし～がなかったら、どうなるだろうか?」というように、重要な要素を取り除いた場合に、何が起こりえるかを想像するのである(Bourdieu 1992=1996: 93; Swedberg 2014: 113)。「反実仮想的に考えることにより、われわれは議論の要点の所在を理解する」(Abbott 2004: 149)。

ここでの反実仮想の対象は J. アレグザンダーらである。すなわち、C. キャミック自身の知的祖先の反省という契機の有無と、アイデアの社会学への影響を考える。表 2 のクロス表は論理的にありうる可能性の組み合わせである。A は現行の因果経路である。以下、B~D の可能性について敷衍していこう。

表2 可能性の組み合わせ

	新しいアイデアの社会学	
J. アレグザンダーら	同じ	異なる
いる	A	B
いない	C	D

5.3.1 協働の可能性——資料論の展開

BはJ. アレグザンダーらの批判が、別様のアイデアの社会学として結実する可能性である。それは一言で言えば、C. キャミックとJ. アレグザンダーらが協力する場合である。

先に見たように両者は人格攻撃を用い、相手を古いものと結びつける激しい論争を展開した。差異にばかり目を向けると、差異を可能にする共通性への視座が失われてしまう。実際、J. アレグザンダーらは、祖先選択は、新たな可能性を生み出し、既存の知的空間を容容させるがゆえに非常に重要なテーマであることを認めている(Alexander and Sciortino 1996: 157)。

とするならば、可能性の空間の経験的研究はいかにして可能かという問いを両者が探究することもできたはずである。実際、C. キャミック(1997)は J. アレグザンダーとの論争後、この方向性を模索している。例えば、1997年に、彼が編集した『社会学の古典を再生する』においては、「評判と祖先選択」論文を、古典化という、(当時)ほとんど理解されていないプロセスを扱ったものと位置づける。そして、過去の著作を、現在に役立つ箇所のみ利用する現在主義に対し、C. キャミック自身の立場を歴史主義とし、その著作が書かれた時点において、そのアイデアを再構成しようとする。すなわち、何を取り入れ、何を排除したのか、著者がその時点で言い得た「選択」を可能にする条件の解明である。これにより「現行の可能性の限定的範囲を超え、理論的代替物の地平を拡大」(Camic 1997: 6)することが可能となる。

このような古典化のプロセスを追うことは、経験的な「調査フィールド field of research」であるという。すなわち、そのフィールドにおいて調査者は、理論家の著作を読み込むだけでなく、「折に触れて書かれた草稿や書簡を発掘し、伝記的環境を明らかにし、様々な先駆者や同時代人が研究対象に与えた影響を考量し、研究対象が属した政治的(または他の社会的)文脈の特徴をつきとめる」(Camic 1997: 4)ことが求められる。

とするならば、古典化のプロセスにおける選択——包摂と排除——を解明するため、どのように多様な種類の史料を駆使すればよいのか。という問いが開かれることとなる。しかし、実際は両者の協働は実現しなかった。その一因は、J. アレグザンダーらの関心はあくまで理論的なものであり、経験的探究に関するドメインを彼らが有していなかったことが考えられる¹³⁾。

古典化プロセスの研究は、その後、N. マクラフリン(1998)、P. ベアー(2002)、F. C. シルヴァと M. B. ヴィエラ(2011)、D. ヒューブナー(2014)、A. ハウ(2016)らに継承され、独自の展開を遂げつつある¹⁴⁾。

5.3.2 隠された差異と新たな対立の火種——R. コリンズと P. ブルデュー

CはJ. アレグザンダーらはいないにもかかわらず、新しいアイデアの社会学という結果は変わらない可能性である。この場合、当時J. アレグザンダーらに代わって、祖先選択の批判をなし得ることができる位置にいた人

物は誰かが問題となる。

本稿では R. コリンズを挙げる。なぜなら、C. キャミック(1992)において、R. コリンズは内容適合モデル論者の一人として参照されているからであり、さらに言えば、論争当時は 1998 年に出版される『哲学の社会学』の準備中であつたと推測できるからである。千ページを超える大著『哲学の社会学』は、創造性の比較社会学と呼ぶことができよう。その狙いは、中国、インド、日本、ギリシャ、イスラム世界、中世キリスト教社会、現代ヨーロッパなど古今東西の事例に基づき、「世界史において長きにわたり存在する知的ネットワークにおける対立と同盟の変動」(Collins 1998: 1)を描き出すことにある。具体的には、知識人たちの対面的交流を「学派 school」(Collins 1998: 65)と呼び、その対立・競合を知的空間の基本的特質と規定する。

知的生活とは、何よりもまず、対立と不同意である。アイデアが生み出される前線は、常に反対者との討論となっている。対立は知的生活の活力源であり、そして対立はそれ自体によって制限されている。(Collins 1998: 1)

このような学派間の対立と競合を生み出す構造的要因を解明することにより、アイデアの生成と変化の因果的説明を試みるのが R. コリンズの目的である。

以上のように創造性を個人の才に還元するのではなく、社会的文脈に位置づけて捉えようとするにもかかわらず、C. キャミック(1992)においては仮想敵とされる R. コリンズは、J. アレグザンダーらに代わって祖先選択に関する批判を行い得た位置にいたと考えてよいだろう。しかし、2001 年の新しいアイデアの社会学において、R. コリンズは、闘争のフィールドとしての学問分野の具体的研究として包摂され、差異が潜在化することになる。

ここにアイデアの生成から正統化への重心の意向を見て取ることも可能だろう。すなわち、先に確認したように C. キャミック(1992)の「評判モデル」とは、新たな可能性の空間における方向感覚の形成に寄与するディーブ・クラフトが、特定の場所にある協働的サークル(Farrell 2001)に宿ることを論じたものである。しかし、2001 年の新しいアイデアの社会学の場合、P. ブルデューの「界」概念が採用されることにより、正統化を巡る攻防が焦点とされているのである。

P. ブルデューの「界」がなぜ選ばれたのか。これもまた新しいアイデアの社会学の成立に関する祖先選択の問題である。すなわち、なぜ、当時利用することができた「サークル」(Camic 1992; Farrell 2001)、「学派」(Collins 1998)、または「分野」(Abbott 1999=2011)ではなかったのか。いずれにせよ、「界」が選択されたことにより、R. コリンズを包摂することが可能になった一方、他方で、それは協働的サークルによる創造性といった論点を潜在化する。そして、2001 年以降の新しいアイデアの社会学は、P. ブルデューや R. コリンズのように知的空間をアプリオリに闘争の場とすることを反省し(Lamont 2001: 89)、闘争以外の選択要因の探究(Gross 2003: 102)や、闘争の場に入る以前の段階へ着目(Camic 2020: 33)することとなる¹⁵⁾。

5.3.3 早すぎた発明——祖先選択における自己強化

最後の D は、J. アレグザンダーらがおらず、かつ、別様のアイデアの社会学に帰結する可能性である。この場合、複数の可能性が有りうるが、資料から証拠を探すという原則に基づき、C. キャミック(1992)において

提示されながらも、他の可能世界では十全に展開されなかった論点が開花する場合と本稿ではとらえる。すなわち、祖先選択における自己強化過程(Camic 1992: 437)の展開である。

誤解を恐れずに言えば、C. キヤミックの「評判と祖先選択」論文は、アイデアの形成を経路依存性の観点から説明するものとして読むことが可能である。しかし、この論点は実際には継承されることはなかった。ここで重要なのは、C. キヤミック自身においてもそうであったという点である。その理由としては、経路依存論を他分野へ応用する試みは 2000 年代に入ってから活発化するため——例えば、P. ピアソン(2004=2010)——、1990 年代初めから半ばにおいては、ドメインの未整備、または媒介者の不在が考えられる。それゆえ、祖先選択における自己強化という論点は、その後の新しいアイデアの社会学には継承されることなく、**早すぎた発明**となったのである¹⁶⁾。

新しいアイデアの社会学は、以上のような諸可能性の潜在化を伴っている。そしてその後は、これらの可能性が、書評やシンポジウムなどの偶発的出来事を契機として、人とテーマを変えつつ、そして、ここが重要であるが、その時利用し得た知的資源の制約を受けつつ、具現化してゆくことになる。例えば、アイデアの発展段階や因果メカニズムに関する N. グロスの研究(Frickel and Gross 2005; Gross 2009; Gross 2018)、集会的創造性の特質——闘争／協働、中心／周縁——についての諸研究(Collins 1998; Farrell 2001; Lamont 2001; Collins 2004; McLaughlin 2008; Farrell 2008)などである。

6 まとめ——集会的創造性をいかにしてとらえるか？

6.1 創造性の社会学

6.1.1 逸脱としての創造性

本稿の目的は学問分野におけるアイデアの生成と変化をとらえるための方法的課題の整理であった。その素材としてアメリカにおける 2000 年以降の知識社会学の展開、すなわち、新しいアイデアの社会学を取り上げた。その際、本稿は経路依存／創造、転換点、反実仮想、レトリックなどの事例分析の方法を用い、その生成プロセスを追うことで、排除された諸可能性を再構成し、現行の限界を拡大するよう努めてきた(Camic 1997: 6)。H. ベッカー(Becker [1982]2008=2016)の響に倣い、新しいアイデアの社会学を、C. キヤミック一人のものとしてではなく、複数の人々の共同行為の産物として描き出したかったのである。換言すれば、事例化(Ragin 1992b)のプロットのレパトリーの拡充である。

冒頭で述べたように、知識社会学におけるプラグマティズムの転回としての新しいアイデアの社会学は、アイデアを常に生成途上のものとして捉える。そして、そのアイデアは、当該分野のメンバーによる時の試練を経て、それが何をなし得たか、すなわち、可能性の空間をどのような方向へ拡大したか(Collins 1998: 32)という点において評価される。

C. キヤミック(1992)は、T. パーソンズを事例にアイデアの集会的創造プロセスを追ったものと言ってよい。創造とは可能性の空間としての既存のドメインからの逸脱である。そのために時に身体化したパターンを忘れ、意図的にアノミー状態となる必要がある。それは「切り離し」、「忘却」、「脱枠組」、「学習棄却」などさまざまな名称で呼ばれる(Becker [1982]2008=2016: 223; Garud and Karnøe 2001: 14)。その結果、

彼／彼女は知的方向感覚の喪失に見舞われる。この時、作品にフィードバックを与え、イノベーターが新たな将来を読み取る術を獲得することに寄与するのが、ディーブ・クラフトを宿す特定の場所に形成される知的ネットワークであった(Arthur 2009=2011; Farrell 2001)。この中の相互作用においてイノベーターは、「元々のアイデアは現実的ではなく、修正するか棄却せねばならないと気づく」(Garud and Karnøe 2001: 18)のである。

創造的逸脱の要点は、「問い」の革新にあるとよい(Csikszentmihalyi 1996=2016: 154)。それは、現行のドメインから排除された事象を分析対象として、他者たちに明確に提示するからである。しかし、新しい問いは、個人が一瞬で提起するものではなく、他者たちからのフィードバックを経て次第に形成される。誤解を恐れずに言えば、日々の仕事とは、常に既に小さな創造的逸脱の連鎖であり、それらの蓄積が将来のブレイクスルーの土壌となる(Csikszentmihalyi 1996=2016:8; Arthur 2009=2011: 155-60)。問いの変化とは、社会関係の変化なのである。

何らかのドメインが与えられれば人は勝手に創造を行うのではない。創造には他者からのフィードバックが不可欠(Becker [1984]2008=2016: 216-20)なのである。ドメインは分野に様に分布しているのではなく、実際は、相違を伴いながら、いわば家族的類似性をもった形で存在している。それゆえ、どのようなドメインを有している人々のネットワークに属しているかが、すなわち、適切な時に適切な場所にいることが、アイデアの創造にとって決定的に重要になる。これを逃せば、新しいアイデアは、批判によりつぶされるか、継承者不在のため消滅してしまうからである。

6.1.2 地殻変動としての転換点

別の角度から見れば、新しいアイデアの社会学は、**創造性の社会学**と呼ぶ領域の開拓であったとよい。それは、アイデアの創造を文脈から切り離し、一人の天才へと還元するロマン主義的な、創造性の個人モデルを徹底して批判しているからである。

しかし、このような創造的逸脱は、既存のドメインの支持者から激しい批判にさらされることとなる。これが新参者のジレンマであり、C. キャミックの場合、J. アレグザンダーらから課された時の試練、すなわち、祖先指定により相手のドメインを変更することで、後続する聴衆の利用を制限することであった。

そして、別の方向へ議論を捻じ曲げようとする相手への対応として 2001 年に新しいアイデアの社会学が提唱されたというのが本稿の見立てである。しかし、その成立は自身の祖先忘却、可能であるが起こらなかったことの潜在化という歴史的偶有性を伴うものであり、その後の新しいアイデアの社会学は、これらの潜在的可能性が、何らかの契機により具現化することで展開していくのである。

C. キャミックと J. アレグザンダーらの論争という、いわば異なる因果系列の合流は、相互に行為のレパトリーに影響を与えるという点において一つの転換点であったと言ってよい¹⁷⁾。しかし、一言申し添えるならば、その転換は、1992 年から 2001 年という約 10 年をかけた地殻変動のごとき転換であった。以上が新／旧のアイデアの社会学の境界形成プロセスである。

6-2 新しいアイデアの社会学の諸課題

以上の議論をふまえ、新しいアイデアの社会学の視点に基づき、知識社会学の方法的課題を五月雨式に列

挙しておこう。

- ①**フィールド**: アイデア生成の社会的文脈をどのように概念化するか。アイデアの生成プロセスを生成途上のものとして捉える新しいアイデアの社会学において、関係性をどのように捉えるかは開かれた問いであると言ってよい。つまり、なぜ、サークル、学派、分野ではなく界なのか。2001年の新しい社会学においてはP. ブルデューの「界」が選択されているが、その使用は暫定的なものと言える。例えば、C. キャミック(2020)は、N. フィリグスティンとD. マカダム(2012)の戦略的行為フィールド概念の導入を試みている。
- ②**因果プロセス**: プロセスをいかに概念化するか。アイデアを生成途上のものとしてとらえるなら、①そのプロセスをどのように段階分けするか(Collins 1998; Farrell 2001; Frickel and Gross 2005)、②さらには因果メカニズムとは何かといった理論的問いが浮上する(Gross 2009; Gross 2018)。
- ③**時の試練**: アイデアの生成と正統化はどのように関係しているか。知的空間においてメンバーの闘争を所与とし、アイデアの正統化の側面のみ焦点をあてるのではなく、局所的サークルにおけるフィードバックを通じて、アイデアが集合的に構築される側面をもバランスよく記述に取り込むことが求められる。例えば、D. ヒューブナー(2014)、C. キャミック(2020)。
- ④**自己強化**: 古典化はいかなるプロセスを経てなされるのか。祖先選択のプロセス、いわゆる古典化のプロセスを追うこともまた、依然として新しいアイデアの社会学の課題でありうる(Baehr 2002; Camic 2008; Silva and Vieira 2011; How 2016)。その際、新しいアイデアの社会学の形成の際に潜在化した論点である、自己強化は一つの導き糸となるだろう。本稿で試みたように、経路依存／創造、過程追跡など他分野の方法を適用する際の窓口として機能するからである¹⁸⁾。さらに言えば、その鏡像としての忘却プロセス、すなわち、次第に参照されなくなり、名声が失われてゆくことの解明も重要な論点と言えよう(McLaughlin 1998)。
- ⑤**資料論**: 可能性の空間の経験的研究はいかにして可能か。繰り返しになるが、新しいアイデアの社会学とは、アイデア生成のプロセスの経験的研究を志向していた。それゆえ、C. キャミックは、自身の研究を理論の研究ではなく、あくまで事例研究であると強調していたのである(Camic 1992)。とするならば、可能性の空間の物質的基盤である、各種ドキュメントからなるアーカイヴをどのように構築し利用するか。その構築の論理の批判的自覚まで含めた歴史社会学の構想もまた開かれた問いであるといえよう(佐藤 2015)¹⁹⁾。
- ⑥**関係的**: 二項対立をいかにして乗り越えるか。本稿の試みは、内容適合モデル／評判モデル、個人的創造性／集成的創造性といった二項対立を所与とし、そのいずれかを唯一の道として評価することではない。例えば、創造性を個人的なものとする議論は依然として存在する(Hess 2014; Swedberg 2014)。これを集成的創造性の側から論難することはたやすい。むしろ新しいアイデアの社会学は、2項対立を可能とするフィールドに焦点を当て、その歴史的偶有性を描き出そうとする。この点で、境界、プロセス、対立を戦略的に選択する「関係的エスノグラフィー」の試み(Desmond 2014)と多くの点で共鳴する。

よって上記の諸課題は、二項対立のいずれかの項目に対象を還元するため基準ではなく、あくまで経験的素材に対し矢継ぎ早に質問を繰り返し出し、新たな情報を探索するためのチェックリスト(Abbott 2004: 92-

109)にすぎない。もちろん、これまでの本稿の議論も歴史的偶有性から逃れることはできない。ここには記述できなかった諸可能性を潜在化しているからだ。本稿の議論も生成途上にある。この試論が後続研究の議論の場(トポス)への架け橋になれば幸いである。

注

- 1) このような知識社会学の捉え方は、以後検討する「新しい」アイデアの社会学の視点に基づいている。
- 2) プロットとは、切れ目のない現実には区分を入れ、要素を配列する叙述形式のことを言う(Abbott 1992: 64)。
- 3) この転回は知識社会学のみにとどまらない。I. タヴォーリと S. ティーマーマンス(2014)は事例研究の方法に、R. スウェドバーク(2014)は理論生成の方法として、パースのアブダクション概念の適用を試みている。さらに言えば、一枚岩でもない。先の R. スウェドバークの関心は、理論化する際に障害となる各種認知バイアスをいかにして克服するかであり、方法的個人主義の点から議論が組み立てられており、探究の共同体は後景に退いている(Reed and Zald 2014)。
- 4) もちろん、事例化は研究者の専売特許ではない。一般の人びとも日常生活において独自の語彙と方法を用いて事例化を行い、物事に対処している。
- 5) もちろん、このような自己強化への着目は経路依存論に始まったものではない。例えば、R. マートンの「予言の自己成就」や「マタイ効果」をその嚆矢として挙げることができる。また近年では「翻訳の社会学」(Latour 1987=1999)にも、経路依存の議論を見出すことができる。
- 6) 上述の初期事象は、経路創造の局面である。なぜなら、それは「既存の経路を再生産してきたあるメカニズムが、新しい条件によって崩壊・転覆したとき」(Pierson 2004=2010: 67)と見なせるからである。この時、重要な役割を果たすのが、既存の文脈から距離をとり、抵抗や無気力にもかかわらず人々を動員する能力をもつ「志ある起業家」である(Garud and Karnøe 2001: 2)。
- 7) 逸脱者としての起業家を、創造的先駆者として所与の前提とすることに警戒しなければならない。そのような前提を無批判に受け入れることで、その逸脱を可能にした、抵抗した当時の他の人々やモノの存在が忘れ去られるからである(Becker [1982]2008=2016: 393; Latour 1987=1999: 234; Bourdieu 1992=1995: 117)。
- 8) もちろん、過程追跡を証拠発見の方法とするのは一般的ではない。例えば、A. ジョージと A. ベネット(2005=2013)は、発見／検証という二項対立図式を導入し、前者の機能を認めつつも、議論の焦点を過程追跡による検証に当てている。
- 9) この場合、仮説が誤りであったとしても、ある証拠が見つかる可能性をつねに念頭に入れておかねばならない。過程追跡による一連の証拠と合致する仮説上の因果メカニズムが複数あるかもしれないからである(George and Bennett 2005=2013: 246)。
- 10) 還元主義の見本例として氏川(2007)を挙げておく。この論文は「人と作品」スタイルに基づき、S. トゥールミンの議論の変容を生活史上のイベントに還元して説明している。
- 11) この種の衰退は、祖先指定により意図的に引き起こされる場合だけではなく、積極的な祖先選択により意図せざる結果として生じる場合も考えられる。
- 12) P. ブルデューは、アイデア生成における同時代人たちとの競合の果たす役割を強調している(Bourdieu

1992=1995: 117)。

- 13) 例えば、A. アボットは、J. アレグザンダーを『『経験的参照なき理論』学派』(Abbott 1999=2011: 262)と呼び、その理論と経験的現実との乖離を指摘している。
- 14) 2001年の新しいアイデアの社会学において参照されているのは、N. マクラフリン(1998)であり、P. ベアーのそれまでの研究の参照はない。そのドメインからの古典化研究の排除により推測できるのは、新しいアイデアの社会学における古典化の後景化である。すなわち、確かに祖先選択を基体としているが、J. アレグザンダーらとの論争という試練を経て、アイデアの生成プロセスの解明という方向性へと展開したのである。
- 15) 局所的サークルにおける集会的創造性を論じた M. ファレル(2001)の書評において、R. コリンズ(2004)はその主張を真っ向から批判している。よって、新しいアイデアの社会学と R. コリンズの差異は 2004 年時点で公のものとなっていたと言える。
- 16) 以上の可能性の組み合わせは、新しいアイデアの社会学において排除された可能性を論理的組み合わせにより再構成したもので、これらの類型は仮説的なものに留まる。さらに言えば、実際の因果プロセスの説明でもない。ここで示し得たのは、新しいアイデアの社会学の形成において、複数の可能性が排除されたという点のみであり、それらの諸可能性がどのように非線形的に関係しているのかの記述ではない。これらの関係をどのように描くのかは新しいアイデアの社会学に課された開かれた問いであるといつてよいだろう。
- 17) 本稿では主に C. キヤミックを扱ったが、論争後の J. アレグザンダーの変化を追うことも重要な作業である。
- 18) 新しいアイデアの社会学において、経路依存を採用することは本稿が最初ではない。例えば、D. ヒューブナーは、小さな変化が大きな帰結をもたらすという視点から、社会学における G. H. ミードの解釈と受容プロセスについて考察している(Heubner 2014: 4-5)。
- 19) この資料論を組み込んだ展開として、D. ヒューブナー(2014)、C. キヤミック(2020)を挙げておく。

参考文献

- Abbott, Andrew, 1992, "What Do Cases Do? Some Notes on Activity in Sociological Analysis," Charles C. Ragin and Howard S. Becker eds., 1992, *What is a Case?: Exploring the Foundations of Social Inquiry*, Cambridge University Press, 53-82.
- , 1999, *Department and Discipline: Chicago Sociology at One Hundred*, University of Chicago Press.(=2011, 松本康・任雪飛訳『社会学科と社会学——シカゴ社会学百年の真相』ハーヴェスト社。)
- , 2004, *Methods of Discovery: Heuristics for the Social Sciences*, W.W. Norton.
- Alexander, Jeffrey C. and Giuseppe Sciortino, 1996, "On Choosing One's Intellectual Predecessors: The Reductionism of Camic's Treatment of Parsons and the Institutionalists," *Sociological Theory*, 14(2): 154-71.
- Arthur, W. Brian, 2009, *The Nature of Technology: What it is and How it Evolves*, Free Press.(=2011, 日暮雅通訳『テクノロジーとイノベーション——進化/生成の理論』みすず書房。)
- Baehr, Peter, 2002, *Founders, Classics, Canons: Modern Disputes over the Origins and Appraisal of Sociology's Heritage*, Transaction.

- Becker, Howard S., [1982]2008, *Art Worlds, 25th Anniversary ed., Updated and Expanded*, University of California Press.(=2016, 後藤将之訳『アート・ワールド』慶応義塾大学出版会。)
- Berger, Peter L., and Brigitte Berger, [1972]1975, *Sociology: A Biographical Approach*, Basic Books.(=1979, 安江孝司・鎌田彰仁・樋口祐子訳『バーガー社会学』学習研究社。)
- Bernstein, Richard J., 2010, *The Pragmatic Turn, Polity*.(=2017, 廣瀬覚・佐藤駿訳『哲学のプラグマティズム的転回』岩波書店。)
- Bourdieu, Pierre, 1992, *Les règles de l'art: Genèse et structure du champ littéraire*, Éditions du Seuil.(=1995, 1996, 石井洋二郎訳『芸術の規則 I・II』藤原書店。)
- , and Wacquant, Loïc J. D., 1992, *An Invitation to Reflexive Sociology*, Polity Press.(=2007, 水島和則訳『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待——ブルデュー、社会学を語る』藤原書店。)
- Camic, Charles, 1992, “Reputation and Predecessor Selection: Persons and the Institutionalists,” *American Sociological Review*, 57(4): 421-45.
- , 1996, “Alexander’s Antisociology,” *Sociological Theory*, 14(2): 172-86.
- , 1997, “Introduction: Classical Sociological Theory as a Field of Research,” Charles Camic ed., *Reclaiming the Sociological Classics: The State of the Scholarship*, Blackwell, 1-10.
- , 2008, “Classics in What Sense?” *Social Psychology Quarterly*, 71(4): 324-30.
- , 2020, *Veblen: The Making of an Economist Who Unmade Economics*, Harvard University Press.
- and Neil Gross, 2001, “The New Sociology of Ideas,” Judith R. Blau ed., *The Blackwell Companion to Sociology*, Blackwell, 236-49.
- Collins, Randall, [1985], 1994, *[Three] Four Sociological Traditions*, Oxford University Press.(=1997, 友枝敏雄他訳『ランドル・コリンズが語る社会学の歴史』有斐閣。)
- , 1998, *The Sociology of Philosophies: A Global Theory of Intellectual Change*, Belknap Press of Harvard University Press.
- , 2004, “Reviewed Work(s): Collaborative Circles: Friendship Dynamics and Creative Work by Michael P. Farrell,” *Social Forces*, 83(1): 433-6.
- Csikszentmihalyi, Mihaly, 1996, *Creativity: Flow and the Psychology of Discovery and Invention*, Harper Perennial.(=2016, 須藤祐二・石村郁夫訳『クリエイティヴィティ——フロー体験と創造性の心理学』世界思想社。)
- Desmond, Matthew, 2014, “Relational Ethnography,” *Theory and Society*, 43: 547-79.
- Eemeren, Frans H. van and A. Francisca Snoeck Henkemans, 2017, *Argumentation: Analysis and Evaluation 2nd ed.*, Routledge.(=2018, 松坂ヒロシ・鈴木健訳『議論学への招待——建設的なコミュニケーションのために』大修館書店。)
- Farrell, Michael P., 2001, *Collaborative Circles: Friendship Dynamics & Creative Work*, University of Chicago Press.

- , 2008, “Comment on Neil McLaughlin/2. Types of Creativity and Types of Collaborative Circles: New Directions for Research,” *Sociologica*, 2: 1-9
- Fligstein, Neil and Doug McAdam, 2012, *A Theory of Fields*, Oxford University Press.
- Frickel, Scott and Neil Gross, 2005, “A General Theory of Scientific/Intellectual Movements,” *American Sociological Review*, 70(2): 204-32.
- Garud, Raghu and Peter Karnøe, 2001, “Path Creation as a Process of Mindful Deviation,” Garud, Raghu and Peter Karnøe, eds., *Path Dependence and Creation*, Lawrence Erlbaum Associates.
- George, Alexander L. and Andrew Bennett, 2005, *Case Studies and Theory Development in the Social Sciences*, MIT press.(=2013, 泉川泰博訳『社会科学のケース・スタディ——理論形成のための定性的手法』勁草書房.)
- Gross, Neil, 2003, “Richard Rorty’s Pragmatism: A Case Study in the Sociology of Ideas,” *Theory and Society*, 32: 93-148.
- , 2008, *Richard Rorty: The Making of an American Philosopher*, University of Chicago Press.
- , 2009, “A Pragmatist Theory of Social Mechanisms,” *American Sociological Review*, 74(3): 358-79.
- , 2018, “Pragmatism and the Study of Large-Scale Social Phenomena,” *Theory and Society*, 47: 87-111.
- Hess, Andreas, 2014, “Making Sense of Individual Creativity: An Attempt to Trespass the Academic Boundaries of the Sociology of Ideas and Intellectual History,” Christian Fleck and Andreas Hess eds., *Knowledge for Whom?: Public Sociology in the Making*, Ashgate, 27-46.
- How, Alan R., 2016, *Restoring the Classic in Sociology*, Palgrave Macmillan.
- Huebner, Daniel R., 2014, *Becoming Mead: The Social Process of Academic Knowledge*, University of Chicago Press.
- Lamont, Michele, 1987, “How to Become a Dominant French Philosopher: The Case of Jacques Derrida,” *American Journal of Sociology*, 93(3): 584-622.
- , 2001, “Three Questions for a Big Book: Collins’s *The Sociology of Philosophies*,” *Sociological Theory*, 19(1): 86-91.
- Latour, Bruno, 1987, *Science in Action: How to Follow Scientists and Engineers through Society*, Harvard University Press.(=1999, 川崎勝・高田紀代志訳『科学が作られているとき——人類学的考察』産業図書.)
- Lynch, Michael, 1993, *Scientific Practice and Ordinary Action: Ethnomethodology and Social Studies of Science*, Cambridge University Press.(=2012, 水川喜文・中村和生監訳『エスノメソロジーと科学実践の社会学』勁草書房.)
- McLaughlin, Neil, 1998, “How to Become a Forgotten Intellectual: Intellectual Movements and the

- Rise and Fall of Erich Fromm,” *Sociological Forum*, 13(2): 215-46.
- , 2008, “Collaborative Circles and Their Discontents: Revisiting Conflict and Creativity in Frankfurt School Critical Theory,” *Sociologica*, 2: 1-35.
- Pierson, Paul, 2004, *Politics in Time: History, Institutions, and Social Analysis*, Princeton University Press.(=2010, 粕谷祐子監訳『ポリティクス・イン・タイム——歴史・制度・社会分析』勁草書房.)
- Ragin, Charles C., 1987, *The Comparative Method: Moving Beyond Qualitative and Quantitative Strategies*, University of California Press.(=1993, 鹿又伸夫監訳『社会科学における比較研究——質的分析と計量的分析の統合にむけて』ミネルヴァ書房.)
- , 1992a, “Introduction: Cases of ‘What is a Case,’” Charles C. Ragin and Howard S. Becker eds., 1992, *What is a Case?: Exploring the Foundations of Social Inquiry*, Cambridge University Press, 1-17.
- , 1992b, “‘Casing’ and the Process of Social Inquiry,” Charles C. Ragin and Howard S. Becker eds., 1992, *What is a Case?: Exploring the Foundations of Social Inquiry*, Cambridge University Press, 217-26.
- Reed, Isaac and Mayer Zald, 2014, “The Unsettling of Inquiry in the Social Sciences,” Richard Swedberg ed., *Theorizing in Social Science*, Stanford University Press, 85-105.
- Ringer, Fritz K., 1992, *Fields of Knowledge: French Academic Culture in Comparative Perspective, 1890-1920*, Cambridge University Press.(=1996, 筒井清忠他訳『知の歴史社会学——フランスとドイツにおける教養 1890-1920』名古屋大学出版会.)
- 佐藤健二, 2015, 『柳田国男の歴史社会学——続・読書空間の近代』せりか書房.
- Silva, Filipe Carreira da and Mónica Brito Vieira, 2011, “Books and Canon Building in Sociology: The Case of Mind, Self, and Society,” *Journal of Classical Sociology*, 11(4): 356-77.
- 鈴木孝夫, 1973, 『ことばと文化』岩波書店.
- Swedberg, Richard, 2014, *The Art of Social Theory*, Princeton University Press.
- 田邊浩, 2008, 「学説研究の可能性——Jeffery C. Alexander と Charles Camic の論争から」『金沢大学文学部論集 行動科学・哲学篇』28: 45-63.
- Tavory, Iddo and Stefan Timmermans, 2014, *Abductive analysis: Theorizing Qualitative Research*, The University of Chicago Press.
- 氏川雅典, 2007, 「ツールミンの議論モデルの変容——批判から寛容へ」『ソシオロゴス』31: 1-12.
- Van Evera, Stephen, 1997, *Guide to Methods for Students of Political Science*, Cornell University Press.(=2009, 野口和彦・渡辺紫乃訳『政治学のリサーチ・メソッド』勁草書房.)
- Walton, Douglas, 1998, *Ad Hominem Arguments*, University of Alabama Press.
- Watts, Duncan J., 2011, *Everything is Obvious: Once You Know the Answer: How Common Sense Fails Us*, Crown Business. (= [2012]2014, 青木創訳『偶然の科学』早川書房.)
- Wolin, Sheldon S., [1960]2004, *Politics and Vision: Continuity and Innovation in Western Political*

Thought Expanded ed., Princeton University Press. (=2007, 尾形典男・福田敏一・佐々木武・有賀弘・佐々木毅・半澤孝麿・田中治男訳『政治とヴィジョン』福村出版.)